

高齢者自身が選択できる医療を

「老人の専門医療を考える会 第30回全国シンポジウム」
開催される

2008年2月23日(土)、「老人の専門医療を考える会 第30回全国シンポジウム」が大手町サンケイプラザ(東京都千代田区)において開催され、およそ90名の参加を数えた。

昨年に引き続き今回のテーマは4月から施行が予定されている「後期高齢者医療制度」。まず会長である平井基陽(秋津鴻池病院院長)氏より基調講演として制度の概略が解説された。その後、高齢者医療の在り方、診療報酬体系の骨子について説明が加えられ、「75歳という年齢による医療の制限」「高齢者の選択に基づかない在宅医療」と2つの大きな問題を掲げた。

続いて「現場からの発言」。照沼秀也(いばらき診療所理事長)氏は「患者さんから見てわかりやすい医療」が求められていると発言し、大川博樹(南小樽病院院長)氏は医療費と経済成長の関係性を考えることの必要性



を強く訴えた。

齊藤正身(霞ヶ関南病院理事長)氏を座長としてのシンポジウム「制度改革で変わること、変わらないこと」では、制度や「現場からの発言」に関して質疑応答が行なわれ、「患者の声が入っていない、使う側にとって安心できない医療体制」であるとの結論が導かれた。最後に齊藤氏がスウェーデンやオランダの例を取り上げながら「なんでも変えればいいというものではなく、日本の医療のいいところは残して、悪い部分だけ変えていきたい」と締めた。